

今回の相談支援つうしんでは「見える化につながる支援:情報不足とキャパ不足」についてお伝えします。

《情報不足》



私たちが関わる多くの子どもたちには「イメージする力」のハンディがあります。

そのため、目には見えないこと、例えば「未来」であったり「段取り」「手順」「時間」といったことがよくわかりません。また、見えてはいてもイメージすることが苦手なため「環境の中から活動の手がかりを得ること」といったことも見落としがちです。

子どもたちの視点からすると「この後どうなるのか」「それをするとどうなるのか、しないとどうなるのか」「いつ終わるのか、いつ始まるのか」「どのようにやればいいのか」「先生は自分にどうしてほしいのか」といったことを、自分なりに情報不足の中で判断することになります。当然のことながら、情報不足の中での判断は間違ってしまうことが多く、これまでの経験で身に付けた少ない社会スキル（振る舞い方）を使って、目の前のわかりづらい状況を乗り切ろうとします。それが不適切な場合は、問題行動として表れます。

子どもたちが混乱した時のことを想像してみてください。スクールバスや送迎車から降りない時。座り込んで立ち上がらない時。他人にひどく攻撃する時。高等部での実習前に不調になる時。生徒指導が必要となるような問題を起こす時など、これらのほとんどの行動は、様々なハンディに伴い生じる情報不足の問題から起きることが多いと思います。

《予防的支援と対処的支援》

私たちの仕事は「情報不足の子どもたちにイメージできるだけの十分な情報を事前に入力すること」です。

小中学部では、『カードや手順書、フローチャート、構造化、教室環境の整備』といったことが、適切な振る舞い方をするための情報入力の手掛かりとなります。高等部では、卒業後の生活がイメージできるように『社会スキルの獲得・生活スキルの獲得』といった授業を積み重ね学んでいくことが、大人としての適切な振る舞い方をするための事前の情報入力となります。

こうした事前の情報入力は「予防的支援」と呼ばれ、子どもたちが未来を見通し自分にとっても周りにとっても有益な振る舞い方を学ぶことが重要です。それは、小中学部の子どもたちはその場面での必要な振る舞い方を高等部では卒業後の暮らしでの必要な振る舞い方を学び取るための大切な支援となります。

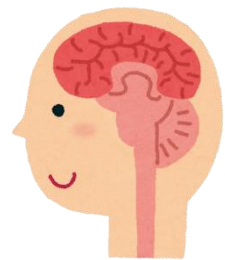
一方、事前の情報の十分な入力にもかかわらず問題行動が起こってしまう時、それは振る舞い方の誤学習・未学習といったことから生じます。実際に問題行動を起こしている子どもたちを目の前にしたときに私たちが取る手立ては「対処的支援」と呼ばれます。

《情報処理のキャパ不足》

私たちが関わる多くの子どもは、情報処理のためのキャパも少なめです。

脳は大きく三つの情報処理を行っています。

- 一つ目 「判断や思考をするための情報処理」・・・大脳皮質
- 二つ目 「感情を司るための情報処理」・・・大脳辺縁系
- 三つ目 「生きるための情報処理」・・・脳幹



それぞれ「大脳皮質・大脳辺縁系・脳幹」がその役割分担を行っています。人それぞれに、この情報処理にはキャパがあり、一つの処理に負荷がかかると他の情報処理が後回しになったり、処理速度が遅くなったりします。例えるならスマホのWi-Fiと同じで、誰かが動画を見ていると周りの人のアプリの動きが遅くなるようなものです。

問題行動が一旦起こってしまうと、言い聞かせても、なだめても、何かを提示して働きかけてもなかなか行動が切り替わらないのは「感情を司る部分が活発化」し、それが情報処理のキャパを使い切ってしまう、「判断や思考をする部分」の情報処理が立ち上がらないためです。「興奮して働きかけが入っていない」「感情に振り回されて先生の指示が入っていない」のはこうした状況が考えられます。

この時には、まずは「感情を司る脳の活動」を鎮めて、「判断や思考ができる脳」が立ち上げるような働きかけを行います。例えばパニックを起こしてしまったときは、その場面での「人」・「場所」・「活動」のどれか、あるいはすべてを取り替えます。「重いチェンブランクケットをかけて、荷重による刺激で活動を変え、脳の注意をそらすこともその一つです。そして、落ち着いてから本人が理解しやすい方法（例えばカード等）で足りなかった情報入力を行い、適切な振る舞い方が取れるように支援をしていきます。

《状況依存》

最初に、私たちが関わる多くの子どもは「イメージする力」のハンディがあるときましたが、それは裏返せば見えているもの、つまり本人がわかっている物には「固執する（こだわり）」ということです。これを「状況依存」といいます。子どもたちが大暴れを継続し続ける時にも、この「状況依存」を活用しています。怒り続けるためには「人」が変わってしまうと困るのです。「場所」・「活動」が変わっても怒りを継続できなくなります。例えば、夫婦げんかをしていたのに、いつのまにか相手（人）が「義父」になり、場所が「カフェ」になり、活動が「食事」になってしまうようなものです。そのときには、『怒り』も収まり相手の言い分も分かり、何が適切なのかという判断もできるようになるでしょう。



《最後に》

「予防的支援」と「対処的支援」は、何が有効なのかは子どもによってその組み合わせが違ってきます。まずは『記録を取る』ことです。そして『試行錯誤をする』ことです。良い教員とは専門性が高い教員のことではありません。『良い教員とは試行錯誤をする教員』のことだと思っています。「アイデアを出し合うクラス」「記録を読み合う同僚」「成果を喜び合うチーム」が私たちの湘南支援学校での職員室の姿としていきたいと感じています。

文責 橋爪

相談カード（教員用） 記入日 令和 年 月 日

対象児童生徒 小・中・高 年 氏名（イニシャル）

1. どのようなご相談ですか？（○をつけてください）

- ①行動面について ②学習面について ③コミュニケーションについて ④運動面について
- ⑤家庭に関すること ⑥ その他（ ）

2. 困っていることは何ですか？

- 3. 今後どのような方法をご希望ですか？ ①情報提供 ②アドバイス ③ケース会 ④他校専門職との連携
- ⑤道具の工夫環境調整 ⑥その他（ ）

担任→相談支援班へ提出をお願いします。